

暁木会会員 各位

平成 31 年 1 月吉日
 暁 木 会
<http://www.gyoubokukai.jp/>

平素は、暁木会の活動にご支援とご協力を賜りまして厚く御礼申し上げます。

今回の暁木会ニュース第 38 号では、祇園景子先生の研究報告、インターンシップ報告、現役最前線など幅広く会員様から寄稿して頂いております。ぜひご通読頂けますようお願いいたします。

今後とも大学、学生、会員等の皆様に幅広くニュースをご通読して頂けますよう広報 G も頑張りたいと考えております。皆様にもご協力の程よろしくお願いいたします。

研究報告（価値工学と異分野融合）

道場「未来社会創造研究会」／市民工学専攻 特命助教 祇園景子

■未来道場

平成 28 年 4 月に工学研究科の一研究室として道場「未来社会創造研究会」（通称、未来道場。ホームページ：<http://www.lab.kobe-u.ac.jp/eng-miraidoujo/>）が設置されました。未来道場は、百年の計、千年の夢を見据えた未来社会創造のインキュベーションと分野横断の融合の学理の試行実践を実現すべく、先端融合研究環 未来世紀都市学研究ユニット（暁木会ニュース No.35「第 46 回神戸工学サミット」と「研究報告」に記載）の一機能を担っています。私は、未来道場の特命助教として平成 28 年 12 月に着任しました。



左手前が著者

未来道場は、平成 26 年 4 月に応用化学専攻・大村直人教授らが発起人となり、小川真人理事が代表として発足した「未来社会創造研究会」が基となっています。発足のきっかけとなった文部科学省「CIO ビジョン対話プログラム」にワークショップファシリテーターとして関わったことが、現在の私の職務に大きく影響しています。その後、都市安全研究センター・飯塚敦教授が、教員や学生、専門分野などに関係なく議論する場として着目し、研究会の名前の前に“道場”を追加して、現在の名称となりました。

■価値工学

私は、神戸大学農学部・大学院農学研究科博士前期課程にて遺伝子工学を学び、遺伝子組換え植物をつくる研究に従事していました。あらゆる農薬を代謝・分解する植物、ダイオキシン類が土壌中に存在すると葉色が変わる植物、花びらが変形してフリル状になった花卉植物など、遺伝子操作によって様々な植物をつくっていました。しかしながら、遺伝

子組換え植物を日本で栽培・販売することはとてもハードルが高く、私の研究成果は社会実装されることはありませんでした。その経験から、基礎研究の成果をいかに社会的価値に変換できるかについて考えるようになりました。これが、私が価値工学に興味をもつようになった経緯です。

価値工学は、1940年代後半にアメリカのゼネラル・エレクトリック（GE）社の技術者であったローレンス・D・マイルズ氏が提唱した価値分析（VA）を起源としています。第二次大戦直後の資材不足に対応するために生み出されたもので、「価値＝機能／費用」という明解な式で定義されます。本来、価値とは、①その事物がどれくらい役に立つのかの度合い、②経済学で、商品が持つ価値交換の本質とされるもの、③哲学で、あらゆる個人・社会を通じて常に承認されるべき絶対性を持った性質（デジタル大辞泉）という意味をもちます。VAにおける「価値」は、①の使用価値にのみ着目していましたが、現在、ビジネスにおいて使用価値だけを見ていては、製品は売れません。役に立つということだけを考えていては、基礎研究の成果を社会的価値に変換することにはつながりません。「機能」を広義で捉え、価値工学を再定義する必要があります。

「機能」を広義で捉えるために必要なことは、多分野の協働です。「機能」を多視点で網羅的に検討するには、一分野の研究者だけでは不可能です。専門分野の多様性と対話が、研究成果を社会的価値に変換する一助になると私は考えています。遺伝子組換え植物の普及には、技術開発だけではなく、日本人の文化的・宗教的価値観を踏まえて法律、教育、広報などに携わる人たちと議論する必要があったはずなのです。

■異分野融合の場

専門分野の異なる人たちが対話する場を提供することが未来道場のミッションの一つです。未来道場が主催で年一回開催している「未来世紀都市フェス」は、専門分野の異なる研究者が、自らの夢と研究内容を語り、参加者らとの対話を通じて新しい気づきを得るためのイベントです。異なる分野の人と研究内容を共有には、言葉の抽象度を上げる必要があります。例えば、蟻の研究者は、「ヒアリ」「アルゼンチンアリ」という言葉を使って研究内容を説明しますが、これを「昆虫」や「生物」などへ抽象度を上げて考えると、蟻の世界が我が事として捉えやすくなります。「未来世紀都市フェス」は、登壇者にできるだけ各人の専門分野との関連性を見出しやすい抽象度でプレゼンテーションをしてもらうように設計しています。平成29年7月2日に未来世紀都市学研究ユニットのキックオフを兼ねて、第1回目を開催しました。ユニット構成員9名が登壇し、学内外あわせて約70名が議論に参加しました。第2回目（平成30年11月10日開催）は、「持続可能性」をテーマにしました。この開催資金はクラウドファンディングによって集めることに挑戦し、1,542千円のご支援を得ました。暁木会会員様にもご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。



未来道場は、学生にも専門分野を超えて対話をする場を提供しています。本学ホノルル拠点がある JAPAN-AMERICA INSTITUTE of MANAGEMENT SCIENCE (JAIMS) と協働で、異なる学部・研究科の学生らが社会課題について取り組む教育プログラムを開発し、これまでに 21 名の学生にホノルルでの研修を提供しています（暁木会ニュース No.36「大学生活の思い出」にて勢川尚毅氏より紹介）。また、今年度からは、全学共通教育の講義「Creative School」を担当し、論理的思考、デザイン思考、システム思考を学ぶアクティブラーニングを提供しています。自らの専門性を深めることと、異なる分野の専門家と対話することが両立できる価値創造人材を育成したいと考えています。



海外インターンシップ助成（ペーチ大学）

M1 向山 潤

派遣先：ハンガリー ペーチ大学経済学部 (RIERC)

夏季休業中の期間を利用し、小池淳司先生に紹介して頂き、ハンガリー南部に位置するペーチ大学経済学部の RIERC（Regional Innovation and Entrepreneurship Research Center）にて、Attila Varga 教授、Norbelt Szabó 教授の下で実働 10 日間お世話になりました。

自身初の海外渡航でしたが、英語での意思疎通を自らに課すことで研究室に配属されてからこれまで学んだ SCGE モデルの知識を相手に分かりやすく伝える訓練、並びにこれまでの学びに盲点はないかという気付きに重みを置いて海外へ繰り出しました。

RIERC は、地域経済の発展につながると言われる起業家活動や地域間移動の活発化によって生じる、従来の地域産業とは異なる‘smart な特化産業’（地域イノベーション）のための具体的な地域開発政策の分析等に取り組む機関です。今後経済発展が急速に進むと考えられるハンガリーでは、どこに、どのタイミングで、どんな社会資本整備を行うことが、どの地域に便益をもたらすのかを知ることが重要になってきます。

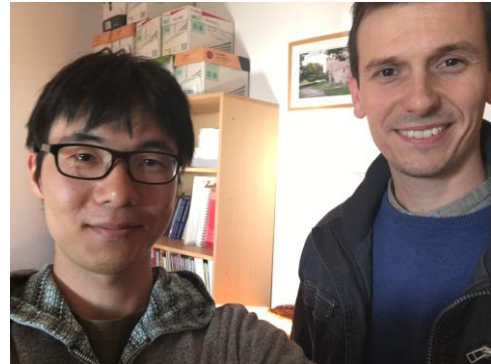
所属する小池研究室には、社会資本整備がどの地域にどの程度の便益を帰着させるか分析できる SCGE モデルの深い知見があります。起業家活動や地域間移動のエンジンである社会資本整備による人流を考慮した SCGE モデルの共有を Szabó 先生と図り、社会資本整備の種類・時期に対する定型化された事実形成の第一歩の作業に主に取り組みました。

今回の経験から得られたことを 2 点述べます。1 点目は英語での意思疎通も何とか可能であるという自信を得られたことです。当初は不安が楽しみより勝っていましたが、Szabó 先生との一対一での打ち合わせであったこともあり、不明点や聞き取れなかった箇所思い切って質問を挟み、着実に理解を進めることにより、少しずつ自信をつけられました。

その一方で、手加減した英語で話してもらう内容すら完全に聞き取ることができないことがほとんどであり、また、思うように日本語での意味を英語で伝えきれず表現を妥協したことが多々あり、このままの英語力では学生の間しか通用しないと痛感しました。

2点目は、本当に困ったときには勇気とか肝っ玉とか情けとかそういう類のものしか役に立たず、それらこそが人をつないでくれて、時に良い方向に向かうこともあるということです。台風 21 号及び 24 号により往復ともに乗り継ぎの北京空港にて大小様々なトラブルに遭遇しましたが、本当に多くの親切な方々に助けられました。人と人との小さなつながりの連鎖がトラブル解決につながる不思議な有り難い体験をしました。

最後になりますが、暁木会の皆様より海外派遣助成金を頂き、一生忘れない経験を積ませていただき、ありがとうございました。今回の海外渡航で恵まれた、多くの方々からの恩を社会に還元していけるように日々精進して行きたいと思います。



Szabó 先生との写真

海外インターンシップ助成（ベルギーの企業）

M1 高村 望

派遣先: Transport&Mobility Leuven

私は 9 月 11 日から 21 日までの平日 10 日間、ベルギーのルーヴェンにある Transport&Mobility Leuven(TML)という企業にインターンシップでお世話になりました。研究室で学んでいる分野において海外ではどのような業務がなされているのか、英語でコミュニケーションを取るとはどういうことなのか、考え方や文化の違いを感じたいと考えていました。

期間中は主に、土木事業の費用便益評価などに用いられるモデルのプログラミング手法の基礎について学びました。元となっている理論については教科書で学んだものと大差なく、英語表記であっても理解をしながら作業を進めることができました。一方、企業の方々と会話することは困難と新たな発見の連続でした。その原因としては英語力が未熟であったことは言うまでもありませんが、それとは別に、文化や言語そのものへの認識不足もあったと思います。

ベルギーは北部フランドレン地方ではオランダ語、南部ワロン地方ではフランス語が主に用いられています。TML の方々は普段はオランダ語で話されていて、私(やゲストの方)とは英語でお話していただきました。言葉や街の違いについてお話しする際にも、他言語との単語や発想の違いに慣れているうえに自分たちの街に対する愛着もあり、聞き取りやすい英語のなかに言葉の壁に日常的に向き合っている方々の説得力がありました。しかし私は、地元の神戸について紹介しようとするときでさえ「海と山と港があって～」という程度で、語彙はもちろん地元の文化や気風に対する認識も浅かったのだと痛感しました。

会話ということに関して、TML の皆さんは特に気を配っていらっしゃるようでした。大

きな会社ではなく社員がみな友人のようであるにも関わらず、毎週木曜日にはお昼前にシュークリームを食べながら座談会で意見交換をし、その後近くの公園でサッカーで本気の勝負をする。そうやって個人レベルでの連帯感を維持していました。実際私も参加させていただいた際には、オランダ語で繰り広げられる会話にも、一会社員とは思えないほど巧みなフットワークにもついていけませんでした。拙い英語となけなしの体力で必死に食らいついていくうちに自然と互いに笑顔になって会話できるようになりました。職場に限らず日常生活においても血の通った交流をととても重視する意識があり、日本人の働き方や人との付き合い方とは大きく異なるものを感じました。

今回のインターンシップではプログラミング手法をはじめ海外でのプロジェクト例やその背後にある社会の事情といった専門分野での知識を深掘りすることができました。それらに加えて、社会に生きる人々の考え方や文化の違いといったことを今までより大局的に見つめなおすことを学べたと思います。

最後になりますが、このような貴重な経験をする機会を与えてくださりました TML のみなさま、小池淳司教授、助成金を支援してくださりました暁木会の皆様に厚く御礼申し上げます。

現役最前線

新しい関西のゲートウェイを目指して ～JR 東海道線支線地下化・新駅設置事業～

西日本旅客鉄道株式会社 大阪工事事務所 うめきた工事所 藤原 慶信 ④ C97M

平成9年に修士課程を修了後、西日本旅客鉄道株式会社に就職して以来、大型建設プロジェクトの計画や実施、組織運営に関する業務に携わってきました。2017年6月から東海道線支線地下化・新駅設置事業を担当しており、工事所長としてプロジェクト実施部隊の責任者を務めています。



○関西の更なる成長に向けて

「JR 東海道線支線」は聞き慣れない路線名だと思います。京都や新大阪から特急はるかに関西国際空港に向うと、淀川を過ぎたあたりで列車は大阪駅に向う東海道本線から離れて、広大なうめきたヤード越しにグランフロントや大阪駅の喧騒を眺めながら大阪環状線に入っていきます。この線路が東海道線支線で特急はるかの他に特急くろしおや貨物列車が走行しています。

JR 東海道線支線地下化・新駅事業は、うめきた地区の西端地上を南北に走行している現在線を地区の中央部に移設・地下化することにより鉄道と道路の交差部分の改善、一体的なまちづくりに寄与するとともに、新たな駅を設置することにより、うめきた地区と関西国際空港間のアクセス向上を図り、国際競争力を有する地域の形成を目的としています。

まちづくりに寄与する「地下化」は大阪市、鉄道ネットワークを強化する「新駅設置」は JR 西日本がそれぞれ事業主体となっており、鉄道工事は JR 西日本が一括して行っています。全事業延長約 2.4Km のうち 1.7Km がトンネル区間であり、全て開削工法のボックスカルバート形式となっています（図-1）。

工事は 2016 年秋に全面着工し、2023 年春の開業に向けて現在最盛期を迎えています。

○粘土の気持ちを掴め！地下水の動きを読み！

うめきた地区は淀川左岸の沖積低地に立地しています。表層には沖積の砂層、続いて梅田粘土層と呼ばれる N 値 4 以下の軟弱粘性土が厚く堆積しており、今回工事における掘削底面はこの層に位置します（図-2）。

また軟弱粘性土の下には高い表層地下水位（G.L.-1.5m 程度）と同程度の水頭を持った帯水層（天満砂礫層）が存在します。

このような条件下で大規模掘削を進めるにあたっては、土留めの変形、地下水の出水、盤ぶくれ等のリスクと常に隣り合わせです。事前の土質調査や設計は当然のことながら、施工中は土留め変位・切梁軸力・周辺地盤高さ・地下水位等の値をモニターするとともに、工事進捗による状況変化には常に細心の注意を払っており、粘土や地下水と対峙する日々です。

○列車の安全を守るために考え抜く

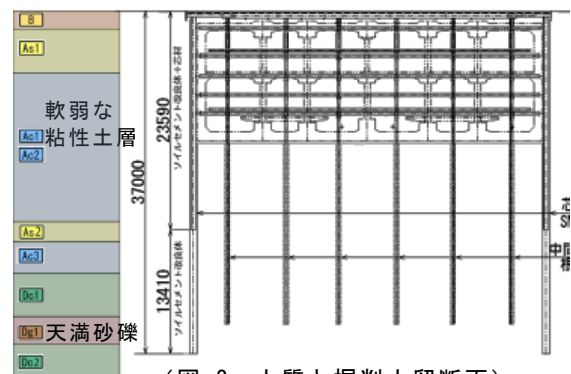
工事区間の両端は鉄道の営業線に近接しており、特に南端部では東海道線や大阪環状線に囲まれた極めて狭隘な空間での施工となります。

東海道線（JR 神戸線）との交差部では、地下化を行う空間を生み出すために既設ゲルバー桁の中間支柱を片持ち形式で受替える計画です

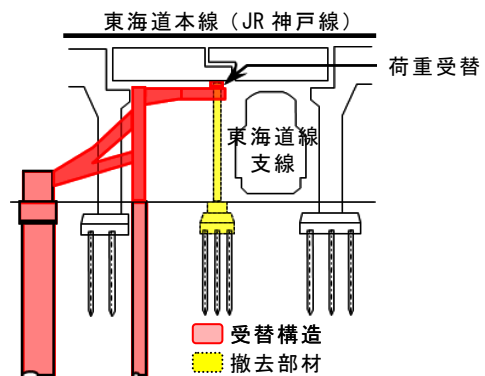
（図-3）。過去に例の無い構造であり、列車荷重による構造物変位も懸念されることから設計・施工段階および列車走行時などのあらゆる角度から列車の安全に関するリスクの洗い出しを行い、設計手法・施工方法・計測管理方法について徹底的に議論して工事を進めています。その甲斐もあり、2018 年 10 月に無事受替えを完了しました。



（図-1：JR 東海道線支線地下化概要図）



（図-2：土質と掘削土留断面）



（図-3：東海道本線受替え略図）

○プロジェクトを進めるということ

大型プロジェクトを進めるためには、技術的課題解決だけでなく多くのステークホルダーとの調整を避けて通れません。時に利害が衝突することもあります。常に「全体最適」・「Win-Win」を考え抜くことが大切です。その中で土木技術者として“掘って立つ技術力”、“俯瞰的視野”、“伝える力”の大切さを感じています。

まだまだ難しい工事が続きますが、社会的な注目が大きく将来の関西の発展に寄与するプロジェクトに携われることを誇りに、引き続き安全かつ円滑に工事を進めていきます。

最後になりましたが、暁木会ならびに市民工学科の皆様の益々の御発展を祈念しております。



(JR・施工会社で工事の節目をお祝い)

現役最前線

建設コンサルタントの職場から

株式会社建設技術研究所 大阪本社河川部 西山武志 ④ 院 29

私は、平成6年に大学院修士課程を修了後、株式会社建設技術研究所に入社し、主に、河川計画分野（さらにその治水分野）の業務に携わってきました。

弊社は総合建設コンサルタントとして各種分野の業務を担い、また全国的に事業を展開しています。私が所属する大阪本社は、主に近畿、中国、四国地方の業務を担当しており、私個人としては、入社以来一貫して国土交通省近畿地方整備局及び四国地方整備局管内の事務所様、さらに近畿地方各府県様からの発注業務が、担当の多くを占めています。

ここでは、河川計画分野における今後の業務動向、また、弊社が取り組んでいる働き方改革の取り組みについて御紹介したいと思います。



1. 河川計画分野における今後の業務動向

【安全・安心な川づくり】

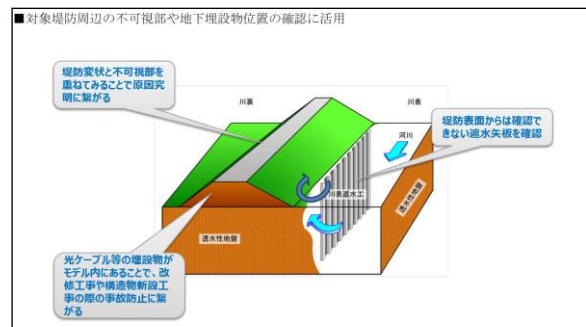
平成9年の河川法の改正に伴い、全国の河川で「河川整備基本方針」「河川整備計画」の策定が進められてきました。それも約10年で一段落し、河川整備計画の進捗点検を粛々と進める中、次段階の整備に向けた計画改定の動きが見られるようになってきています。

2018年はいわゆる「西日本豪雨」による堤防決壊、土砂災害等が大きな社会的話題となりました。避難体制の充実など人的被害を最小限に食い止めるソフト防災対策と共に、ハード防災対策についてもまだまだ不十分な部分があると痛感いたします。

近年、雨の降り方が局地化・集中化・激甚化する傾向が顕在化しており、そうした気象状況の変化も踏まえた計画改定が必要と考えています。

【河川の維持管理】

維持管理をいかに効率的・効果的に進めていくかという点も、他の土木分野と同様、河川においても、常に今後の課題として挙がるテーマです。私が近年担当した業務では、CIM（Construction Information Modeling）と呼ばれる3次元モデルを、維持管理に活用していく構想をとりまとめました。今後、こうした維持管理の新しい手法がブラッシュアップされ、全国に普及していくと思います。



CIMの河川維持管理への活用イメージ
 （出典：CIM導入ガイドライン(案),
 H29.3, 国土交通省 CIM 導入推進委員会）

【海外業務】

弊社は2017年度に、英国の中堅コンサルタント「Waterman Group Plc」をグループ会社化しました。今後、各企業でこのようなグローバル化の動きが進み、海外事業部等の所属でなくても、海外業務に携わる機会が増えていくのではないかと感じています。

2. 働き方改革の取り組み

国の主導により、「働き方改革」として労働環境改善に向けての動きが進む中、長時間労働が積年の課題となってきた建設コンサルタント業界にも、「働き方改革」の波が押し寄せています。弊社の取り組みのいくつかを紹介します。

【業界一斉ノー残業デーの実施】

弊社も所属する建設コンサルタンツ協会主導により、一斉ノー残業デーの取り組みが、ここ数年、年2回（6月、10月）のペースで実施されています。一企業単独ではなく、こうした業界としての取り組みは効果的と感じています。弊社の大阪本社ではこの取り組みに合わせ、2018年10月最終日のノー残業デーには社内で音楽ライブイベントを開催しました（私は演奏者として参加）。



音楽ライブの様子



【シフト勤務制度・時間単位年給制度】

あらかじめ申請することで、通常勤務の時間帯である9時～17時からずらして勤務することができる制度がシフト勤務制度、1時間単位で有給休暇を取得できる制度が時間単位年給制度です。弊社では、今年度（2018年度）から新たに導入されました。

前者は、私個人はまだ利用したことがありませんが、朝の通勤ラッシュを避けるために9時半～17時半勤務に変更したり、朝早く出社して早く帰るパターンの8時～16時勤務に変更している社員を見かけます。皆さん、早速制度を活用している様子です。

後者は、1年について5日の範囲内で取得可能となっています。半日単位の休暇取得制度は既に存在し、個人的にはそれで十分と思っていましたが、時間単位で取得できると便利な場面も多く、意外と使える制度であるとの印象です。

【在宅勤務制度】

自宅で、リモートアクセスにより会社のパソコンを遠隔操作可能な仕組みが導入されており、在宅勤務者は、紙の資料が見られない以外は、ほとんど会社と同じ状況で作業できる環境が整えられています。

在宅勤務を実施できるのは、週 14 時間が上限となっています。育児や介護のために、在宅勤務を希望する社員が増えてくるのではないかと予想されています。

【勤務地・勤務時間限定正社員】

勤務地限定正社員は、身近にまだ聞いたことがありませんが、勤務時間限定正社員は、子育て中の女性社員が利用されている場面が多いようです。勤務地限定正社員についても、親の介護等の都合から選択する社員が今後増えていくかもしれません。

このように、働き方の選択肢が広がることは、各社員の家庭の都合やライフステージに合わせた多様な働き方が可能となり、非常に良い方向ではないかと感じています。

3. おわりに

月日の経つのは早いもので、社会に出てから、25 年を過ぎようとしています。しかし、技術者としては、まだまだ未熟さを自覚する場面もあり、今後も精進を続ける所存です。

広島支部総会報告

1. 日 時 : 平成 30 年 8 月 3 日 (金) 18:00～20:00
2. 会 場 : 広島ガーデンパレス
3. 出席者 : 【来賓】藤田一郎教授、北田正広本部長、西本靖岡山支部幹事
【支部会員】11 名
4. 議 事 : 平成 29 年度会務報告、平成 29 年度会計報告、広島支部役員
本部総会報告、大学の近況報告

大学より藤田教授、本部より北田会長、岡山支部より西本幹事をお迎えして、平成 30 年度暁木会広島支部総会が開催されました。

総会では、支部事務局より会務報告・会計報告を行い、北田会長より本部総会及び本部の活動予定、本部会計の安定化に向けた取り組みについての報告が行なわれました。藤田先生からは、学生の進路や授業制度など、大学の近況についてご説明をいただきました。

藤田先生には、さらに最近の研究紹介として、「河川流の計測技術や画像解析技術」に関してもご説明をいただきました。ドローンなどの最新の空撮技術を活用した研究内容に、皆さん、真剣な眼差しで聴講されておりました。講義の後には、熱心に質問して学生時代のように学びに励まれる姿も見られました。

総会後、懇親会が開催され、会員方が活発に交流を深めておりました。

最後になりますが、2018 年は大阪府北部地震、平成 30 年 7 月豪雨、平成 30 年北海道胆振東部地震と多くの災害に見舞われた年となりました。災害で犠牲になられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方が一日も早く元の生活に戻られるようお祈りしております。

報告者：暁木会広島支部事務局 復建調査設計(株) 木村裕行 (08C10M)



総会の様子



集合写真

岡山支部総会報告

1. 日 時 平成 30 年 8 月 26 日（日）
2. 会 場 ピュアリティまきび
3. 出席者 来賓：中山恵介教授、金治英貞本部副会長、支部会員：22 名

平成 30 年度の岡山支部総会は、大学より中山先生、本部より金治副会長をお迎えし、開催されました。総会では、江原支部長の挨拶に続き、中山先生から研究の紹介や大学の近況等、金治副会長より本部の活動状況などを織り交ぜたご挨拶をいただき、支部助成金目録が贈呈されました。その後、支部役員の改選が行われ、江原支部長、桐野副支部長が共に留任で選出、会計報告も承認され、総会を滞りなく終えました。

総会後は、まず西垣顧問の発声により西日本豪雨の被災者へ献杯を行いました。

続いて、懇親会を行い、美味しいお酒や料理が進むにしたがって歓談の輪が広がり、終盤には、新規入会者の自己紹介や広島支部・小田委員よりいただいた広島銘菓・もみじ饅頭を賭けたじゃんけん大会や安井先輩から趣味のギターを披露していただくなど仕事や世代を超えて様々なお話を伺うことができ、楽しく、有意義な時間となりました。最後は、吉井顧問の一本締めで、盛況の懇親会を終了しました。

今後も支部長、副支部長のもと、いっそう暁木会の活動の輪を拡げていきたいと考えております。若手のみなさまのご参加もお待ちしております。

末尾となりましたが、今夏は全国各地で大規模な災害が発生し、地元・岡山にも甚大な被害をもたらしました。被災者の皆様に哀悼の意を表しますとともに、土木技術者として今後の復旧復興に取り組んでいきたいと思ひます。

報告者 暁木会岡山支部事務局 岡山県土木部港湾課 吉田正樹 (01C03M)



松下綽宏氏が瑞宝小綬章を受章

平成 30 年秋の叙勲において、元神戸市助役の松下綽宏氏^⑬が地方自治功勞の功績により瑞宝小綬章を受章されました。暁木会におかれましては平成 8～9 年度に副会長、平成 11～12 年度に会長を歴任され、現在は顧問として暁木会の発展にご尽力頂いております。会員一同、長年のご功績に対する栄えあるご受勲、心からお祝い申し上げます。

暁木会年会費納入のお願い

暁木会は、母校の発展、学術研鑽並びに同窓生相互の親睦のための活動を進めておりますが、会員の皆様からいただく会費を収入源として運営しております。平成 30 年 3 月末時点で約 1,100 名の会員各位にご理解とご協力をいただき、会員名簿や暁木会ニュースの発行、総会等の行事、市民工学教室への援助などの事業を実施しております。

会員の皆様には、暁木会の活動にご支援・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

しかしながら、会費を納入いただいている会員数が未だ十分ではなく、このままでは会の活動にも支障を来しかねない状態となっております。つきましては、大変恐縮ではございますが、会費納入の手続きが未了の会員各位には、会費の納入にご理解とご協力をお願い致します。

1. 年会費額 ￥3,000 円

年会費納入の登録をいただいた会員には、暁木会会員名簿（2 年ごとに発行）を送付させていただきます。

2. 年会費の支払い・登録方法

集金代行機関として三菱 UFJ ニコス株式会社に委託し、会員の指定金融機関から年 1 回 10 月頃に「自動引落とし」させていただいております。

会費納入の手続きが未了の会員各位には、info@gyoubokukai.jp に氏名、連絡先を記載の上メールしていただきますようよろしくお願いいたします。「預金口座振替登録書（集金代行）」と「返信用封筒」を郵送させていただきます。

平成 30 年度の名簿発行について

今年度は、2 年に 1 回の名簿の修正版を発行する年となっており、会員の皆様には改訂名簿と今号の暁木会ニュースをお届けしております。改訂にあたり、誤記あるいは未更新等不十分な点も多々あることかと思いますが、ご容赦をお願いするとともに、訂正等ございましたら、お手数ですが KTC 事務局（TEL: 078-871-6954、FAX:078-871-5722、E-mail: ktc-k@nifty.com）までご連絡をお願い致します。

なお、会員の個人情報につきましては、名簿を所有する会員の皆様で管理徹底して頂きますようお願い致します。

最後になりましたが、業務多忙の折、執筆を引き受けてくださった皆様、名簿改訂にあたりご協力いただきました企業等の職場担当の皆さまには心からお礼申し上げます。また、会員の皆様から、本ニュースへの新企画、寄稿などを募集しています。特に、同窓会をされた際には、ぜひその様子を寄稿下さい。

その他、ご意見ご要望等ございましたら、下記連絡先までよろしくお願い申し上げます。

発 行 者：暁 木 会

E-mail：info@gyoubokukai.jp

連 絡 先：常任幹事 広報 G 門脇 正夫 ㊴

阪神水道企業団

TEL：0798-52-3170 FAX：0798-52-2075

E-mail：kadowaki-m@hansui.or.jp